竪琴草紙

美妙

特別
文庫14
A160

53-1705

景福殿文庫

東京　樵耕蛙船編

第九回　愛妾慧敏英王を試む　奥賢好悪逆事を聞く

窮達命運栄枯時に因る場合英王亜弗勒々不運の折り逢ひ
忽ちて都を離れ勝に里の白屋に身を寄せぬる後に怪まれし
と思ふに家事何くれと手傳ふものゝ波緑帆達々下々其人品を
知るにつけて毎々之を押量めど何事をも為さしめざるに因て亜弗勒も亦
花羅し為ることなく一日二日と過ちて富むすべなき人の家に養はれ
肉苦しき処とて賤き業なれども素より為馴れぬ御身なれば好
手按とも為ず由なく人なき折を類ひて一日も早く賤を逃げ国家を
安穏なる手段を求て花羅と談合ひて在ほど紀元八百七十二

年の夏のはじめとなるまで此日波羅蜜参詣して市まで一年の賣物買来ぶんとて出行ける花離しまゝ同行を頼まれて豆弗勒の御兄許にて偶〻出立ちつゝ帰るに安堵の心なきぬ用事もいつなれば豆弗勒も唯一人牧場を四歩やせて牛羊の眠る様なれど雲時蕭々たる思ひ涙の種なるべし偶〻ふれば巳に早二歳三歳と過まる金殿玉楼に安居して賜ふ様々夢まぼろしと見るとても思ひ社稷を捨てゝ此有様見るもいとせめて白屋に住せて送ぐんとて思ひきやそれとも知られぬるものは憐れなるべき八氏の事何罪咎もいつなれば賊の累う出遇ひ難楚困苦に受くる皆朕が胸甲斐無きまゝと思ひ恥ぢやも迷も此身を捨る身と思定めて[illegible]粉骨砕身の労てとゞまれ今一度昔の様まるとて独嘆嘆も其折しも主人波羅蜜の妻

今度昔の様なる[illegible]主人波羅蜜の妻愛安々厨の方より馳来る豆弗勒に打向れ既に午まで近ければ麺包を焼て待りとは思附きぬる用事の侍ぬ今しも外に参るべき雲時が刀どぶの麺包の集ぬるを立出るに豆弗勒も本より無聊なれば厨の方に至りぬ薪を折投入れて吹きて雲時其儒在ほどに只見れば承塵の上に寄りて造りる半弓一つ掛置せり強き葛の嫩枝を用ひて張るもなるべし押手は鉄にて蔵ひ[illegible]打見るにまるで苛めく力の俊れ者なるべし得控えぬ見えぬるを[illegible]の為めに思ふる豆弗勒の事なれば見るに得堪へぬ御手と延しやすく之を取下し塵を拂ひて[illegible]なくし試るなるに控き

なかなかで強きこといふべうもなかりしかど世は大力なる者なればとて控難うんと暴まうし見しかど俳聘は非ざりしかどもこれ此強弓を控ざまもなく此家は無きものとなるべうはいかなりてか承諾なるべきもこれ掛置くんや如何波緑駝の参謁の二人は又違ふべうもなく既は此家は替らしとうも月さへ計多経過しぬ様子を見るは家の者皆是忠実なる体なるは狐疑なるはや詮なるべう折て見合せ吾身の幸生遺なるべう告知しは是とも扶接とるべうはず事は於て奉とも存ぜんなるべう呼然なるべう独語尚其弓を取りて接まぬ御心の直ハき弦の一筋うべう行末やでも想像り麺包はハ心と留めざれば麺包をいうべう集薫うべう烟り昇らばうべう斯とも知て主人の妻愛者の所用を成果て帰まうし我家の門開きて厨は進ぬべう見れば麺包を集薫うべう其傍うべう要弗勒を承諾

の弓を取りて心は留めざる体なるは愛者を呼と急入りて要弗勒の密亭李を磯と眺附け壱のべうやは密亭李大人何事ぞ此ていたらべうべう見なるはやはは麺包を集せよと嘲を頼まし憎さ無しと罵詈べう要弗勒を始めて心附なるひべう或は驚き驚き憐ぶ應べうはて見えぬべうば愛者はいよいよ急立ちて假令べうはなる音ちと麺包の集しう集ざるべうハ知べうとべうべうべう故はべうべう嘲の日々打嘯て生命を撃べうものべうべう何はもせん腰立しやと問道べうべう斯べう集果べう虎のごと成りべうべう聞は投出べう手先狂べう要弗勒が面部べう発矢と打当べうべう麺包べう砕べうべう散舌し此虜は彼虜も皆陣べう鹿手玉べうべう嗚呼此王は薄命なる雷は蒙塵しべうべう時の世べう恥辱べう加べうべう御心の裡の傷べうべう劫々書べう愚べう尋

常の者の身なれども怒り怒りて現れて由なき業をも及ぶまじき素
より忍耐仁恕なる事は君子の有様なれども己の頼まれたるものの氣を注め
さるし過ちなるを愛年の怒るし理りと思ひ此しも爭はるまじ
言葉を尊び身を賤めざる其が過ちぬいと珍らかなる可ゆゑ
心を取ふるくやうばらくとなる事をなるる以後くこと
なべらんで救しこのくらべられど慣と思ひ許してはべと掻口說
きはくく謝はるるに誠や尺蠖の屈まるを以て信じん事を求んばなる
竜蛇の蟄まるを以て存身を存じ是故くに管仲を公子糾
の敗るるを以て幽囚せられ恥とせざる韓信を淮陰の少年が股
下を俛るを笑はるを意とせざる英雄の心事簡策に其後来る赫
たるは忍耐まし宜なるも閑話休題愛年をめとと聞るとも何
思皆ん突と立て外面の方を走りて遠邦方を平伏し我王

忍耐仁恕の御心なるは如何なるとも略知りなるべく尚更に大望
懷を抱まるる御身を在せば尋常の人の及ぶまじ程なるべとと
匹婦の卑見なれども麺包の集して機事なるを心なるべき無礼
なるべく試みるべるべるべるべるべ思しくべ怒りし御氣色なるべく去
打謝るべるる御心の加どのべるべ頓べ国賊平定の日も近くこ
て侍るべべべ死べべべ容ぬ罪の程べ唯御宥を願べべべ然れば
丈なる彼緑舵も又勇なる参遜も微賤なるべも王土の民忠義の字
[illegible]仇を思べべし侍べべ傳べも聞べべべ彼の参
遜べ生得べ耳聾べ好べ侍べべ望べべ任べべ簿笠なる暗門
度大人べ仕まべべ若虎べべべべべ思慮なるべ賊の再襲其城
遂べ陥べべ大人べ言死したまべ折べ臨べべ参遜が忠実なるべ
知べべべ夫人はべの二べべの御子べ護れべ仰べべべ其演毒

ら家とうらて丰敦ま侍りとクバ隨即其処で目的すると忍者はすぐ追付うれつて夫人と其場まなりたるを失せの氏江
興資とくる迎者を追付うれつて夫人と其場まなりたるを失せの氏江
守の和子を鷲ま捕られ美麗の姫は海まへうせんとするを惜し
くぬ命でしをし永くくく夫人苦草の御首をバ取りかわるせくに
帰来りて其後を其父の住居も影蔭くく逐ま此父まハ移う住く表向
ま無情で手しつて心を日々ま我王と江守美麗の二方とを尋ぬ侍
りしまこれも得せぬ去歳の暮門でかとなるく雑人を凡人なるじと参
遇が言ひけま因くく寄せまねくせも熟仰き奉るま紛れもなくぬ我国
の只一人の大王なれば喜をしきとと侍りきまいるので用護まなるせん
とおれとなるて駐めなつうが目まだつ何とやん君まも明
しなるとねバ聞上るま便なるとく黙しなるしを幸まも麺白の隼しま
やうを得くやうを無礼ま候はくるを是より後を御心を悩まるめ

ぶれどなるくもさくくとも在くくよと言ひつくよくと泣陳む
なるとを尊まも乎弟の御身のなるくを見れどくと堪えのね
く胸を痛るを故なるるば始終を聞ま事無きまを此
處の家のものは総く野心のこのものなるを見ても我名を明さんと思
ひ居くし折なれば程なく應へくを安堵せんと思ひなるで愛妾が
言を聞を均しく感じある御氣色をを麗くく十室の邑まを忠
臣なる永く養をれ きまを人を接ぬ処なるふ零落をくしものと知
りが徳なるを咎めをせで尚もなるまにねんとくふ伊達家内のものど
もの心の奥で動見れるが恥なるを
やうく料られねくしと宣ひつ又此愛妾が早速の氣轉ふ志でを打
明せを種々なる賞めなるく愛妾ハとと畏をて此身まのなる仲
言なるを當り侍ぶんや彼緑船参遊等が三帰うと上事行

ゆれどもこれを喜び侍るべしこゝを厨より候ゑさぶ奥へ用いる
まぐ要勒ハ昨夜より風邪に侵されのぼり御目ふるめき頭痛
さへいとゝ烈しく為始めて堪難きまで覺えるゆゑ愛母を藥を調へんとする奔走せる
助ふれば奥間へ入りぬゝ愛母を藥を調へんとする奔走せる
ものゆゑ波緑舵等が一刻も早く帰る由もやなと思へども空湯
さへ待どころにもど帰るなど心頼よ焦燥つ要勒が御氣色をとゝ
るゆゑ見えぬゝ今も猶豫もなるほどに奥の間の次なるに此
半道ばかりの里に藥賣る家侍れば一走りにも取りまゐらせん勿体な
ゝ侍れども霧時迅にて在せるし」といつて軽く打拂ひ逸足出し
く立出る跡より怪しや此家の庭の側の杉がまりより窺ひ見られ
一箇の曲者共蒐と笑ふ共後れじと愛母が跡を追駆ける此者も
これ何物ぞ亦是枯樹嵐が雑兵なる奸悪無双の魅賚なり

第十回　奸徒烈士を殺して勇夫脱獅と闘ふ

今是の魅賚がいかなる者なるかは忍び居しに聞くに去る頃の秋曄門
度が居城簿等を火を放ちこれを落城なさしめつゝ又枯樹嵐が指揮で
含ま江守美麗を追蒐なる杉繻澤に及びて捕縛なる欲せ
豈料えんや附添なる参謀無双の勇ありて十分に打闘れ遂に三人で
バ殺し得ず参謀さ〻不取逃し詮方なれば阿客々々と苔草が戸厳
で取収めて証となるて本陣に帰着きつゝなるていと事遺漏なく
語るかゞよ枯風樹大に怒りつゝ這回の役目ハ甚重く此方に当るのなら
んゝめ汝ハ苔草等三人の者の聞て定に見知られぬ衆くの中に抜擢
ちゝを者を諾ひるゞ肝要なる者を殺さずして厳のゝ本陣に持帰り取逃
せしと言ふゝ怒れるて事の酒もむべなるや苔草の厳そ

首しるされぬ信ぜられぬ此度糾問せつきるとも前切てくしく訴
きん何處へゆくと仕へると其儘放逐の命を受けて流石の勢賢も
驚きて首の無きハ参遂ぐやきして行きたるものゝ偽なんどゝ
思ひとゝまで真場を於て戰ひ兵背を問ねて綽分明を候もん
と諍にしく詐ふれど枯樹嵐毫々承知せず遂に軍中を放逐さる
是ゆう流浪の身となりて彼方此方と彷徨しも思もよき事のなく
きれば遂に緑林の業を学びそこなての家を押入りて金帛を掠取り
無残の所業をなすれども天運ゆるく尽きぬ久しくともなほ
無熟見る入来りて稼きせんと近傍の家を頻来しを只見れば人も
見えぬ鎖しもなき家なりこれ家業と思ひ入りて遂に様
子を伺ふに内ハ空を詰声を何事ならんと身を忍ばして
耳を側てつゝ聞ぬ思ひきや人の妻子と英王なる要弗勒が語るな

ばぬ呆るまでに打驚き動よるべく思ふやう扨も已れが運のよ
きかゝ浪々の身となりて思ひ盗ふべきと思ひ入れば盗ふべきものも
のゝ少なくて再び枯樹嵐を帰参を許されん法制を言ひけ此世を送
る由なかるべしと思ひ天に祈願の叶ひめ又と得がたき要
弗勒を是必ず料ぬ見るべ入しを枯樹嵐を言出ずるを是を這回の切
とて帰参のるまで叶ひん旨しと打頷き猶も様子を窺ふ
愛妻を薬を買来んとて要弗勒を待門口を出でんとす
難賛をいよ打挨び折も折とて要弗勒が頭痛を悩む好機會なり
愛妻が出行かしを此方を便宜なるこのまゝ踏入り殺さんか否々な
ものも妙なるまで彼奴を頼る副者些の病氣なるとも特手を乗るべ
ものなるまでさるまで是ゆう愛妻を追蔓に打殺しある其跡を枯樹嵐を
告知るも詐手を向るる至極の計策なる要弗勒を捕入事夢の切を取る

易うう愛妻を追蒐ねんと備これ前岡よ法の
隠れ処と言ふ愛妻が跡を踪ねしうう愛妻を神
なぬ身のうぐらんと知りぬ王の大事と思ふ故廿
る事うう甲斐々々しく足よ仕とう走りて心のうちよ尚卒しく一時
なるし速早く御ふ怪きの癒りしと念ずる事の殊勝なる頃や五
月の末つ方梢の花も散り行き毎情の風よ散行きし名残りの
これ枝なの若葉ぐらよ行く月し例よ似る身のかどや更消え
んとて去る事可心とも不一点おの直ぐ道を蹈分け早八九町
も来ぬうんと思ふ時しも後辺とべ誰とうう待ちかねて
声なの陰に隠る者ぞ何事やうんと手駄やう近づくふ其人
を陰ぐうう見るよ知せなるなる詞うう蹈躇ふりどよ甦資ぐ早々
も近づきう物もいとまで抜撃よ打下しうる刃の電光閃くる愛

妻や吃驚咄嗟とぐりう身をやそ甦資ぐ思てぐ空をうわ力
餅りて銭知ぐ前よ確と伏轉ぶて愛妻や逃さだ走寄りて刃を奪
うるるるぐ運の尽きるや謂ぐ中身を無手振しるぐ
甦資ぐ慌てふめきて馬とはりうよ引取る迷の力よ無身やな愛
妻が指や破落々々と一弾ぐ断落ちる疵口ぐ迸る血潮の
ぐるぐ紅糸で十筋巻れ引よ異るぐ流石よ剛氣の愛妻なのぐ見
るよ是ぐと仰天ぐ思ぐ油断を見澄し曳と甦資が声を
掛け左手拂ひ大刀ぐ愛妻が左手を切落ぐ餅る勢ぐ脇腹を
ぐうぐ撃ぐ何や堪ぐアッとぐ倒れ卒ぐ甦資ぐ漸ぐ落付き思ふ
ぐ甦資ぐ漸ぐ落付き思ふ這奴が手強き
ぐ是ぐ夜ぐ日よ経ぐ上ぐは最早心驚ぐ直走ぐ走り行く事趣

嵐は注進せんとするまゝに此侯走りて此侯に捨置きるゝまゝ早く
畢勅は密せるゝに料られぬとさゝやき所謂蜂掃ぶに元價は返し
難うるん否々此侯打出でゝ知れども四方は知れ
る人なし〳〵我が殺せと密せんと入るゝ夏は光陰費し時遅れな
ば骨折損草取序はいざさらば見とり直ち一走りと獨語はく身に繕
れ此頃枯樹嵐が留りうるる助わ畢勅が在しける咸塞の国に指し頻
に急ぎ行きたるほどゝ其次の日の午過ぎに既に枯樹嵐が陣に来
まで直ちに戍兵は向ひ〳〵緯趣に略設ひ何卒主君枯樹嵐は見参
の上意事を慎う聞上げさせぬこの〳〵と礼を尽さ〳〵勅願ありて
戍兵に造ひと枯樹嵐は言入れば頃〳〵枯樹嵐は許多
の近習を従へ〳〵〳〵非常に警め〳〵奥賓を呼入れ對面に當
下賜賓ち業し〳〵遥遠方は平伏し暫時しく頭に撞け恐る〳〵

る〳〵身不肖ちる事は阿容々々再び推参し尊威に汚しまはるでも厭
なれぬ立處は拝顔に得ぬし事有難ふ〳〵奉き事まで侯
なれ備某事性る頃不肖ちる〳〵我王の勘氣に蒙うた後々徒遺憾か
ぎうる〳〵日夜声を呑むばかう憂苦は沉む候ものゝ〳〵〳〵御恵
氣に解ぬるとも思ふのうまて諸処方々日毎々々遍歴ち彼
の何処へも落ち〳〵畢勅が所在をば尋ぬる事凡一年昨日料らぬ畢
勅見まて怪き家の有るを認め身を忍び〳〵窺ひ日来日来尋ね
る畢勅が隠家すゝ〳〵家まて立この主人は〳〵何とやらん名乗れると甚事一
人其弟參遊と〳〵睡門度が若党なるしと今一人の若者とが侯ふ由されど其
日は折もとゝ〳〵男子等三人〳〵羊を買ふ市に出でゝ〳〵畢勅と
愛母とのみ〳〵唯二人侯ひ事の便宜ち是ぬるまで畢勅が俄の病氣安
安〳〵一人身なんるゝ〳〵薬買ひ出行れば某遣されば追駆て忽

之を斬殺し、[illegible]馳出でて[illegible]隨即足を
打任せて直走りに走参り候ては仰願ふべきなれ
ども、其が前過ぎてはいかほどか[illegible]
る詩牛を下して搦めぬは何と[illegible]
し詐りなりしことの偽りなるを疑ひ出でぬと真事虚事打雑ぜて頻りに止めざるを
枯樹嵐僅に打點頭、今詐へる繆却偽りなるべき神妙なる異しき
西弗勒を搦得て国皆平定し終りて功をもつて帰参を許さん翌日
いつて敵下の重立ちたる一陣を堅く打守らせ隨即二百の精騎を俱し
西弗勒と同じく其下其生再説不題、波緑舟参遼花離等を羊を
買入れんとて打連立ち出行きて二里有餘の程を過ぎて漸く
市に着きたりし此市と云ふは此頃獣商人が相集まりて為さもなき

猿兎の類を更なり、虎の猛獣に至るまで或は外国より購求り
或は内地にて得たるもの総て之を賣買ひ獣どもの唸る吉うるる雷
落るが如く最凄ましき様なれば虎ふるへさしらず波緑舟参
三人の者は羊買はんと来りしなれば獲て其力を試み賣人と詐判調ひ
是ぬのやうの手を買受け霎時其虜を繋ぎ置き疲倦を休めて在る程に
忽ち獣小屋の方に当りて烈しき物音あると聞く際もなく猛獣と
奔出でたる一の大獅子牙を剝き鉤爪を鉤なる鉤爪を鋸の如く歯を化して[illegible]
見るかぎりの猛獣なること[illegible]と其場に在りし獣商人を始めとして
波緑舟花離参遼等も驚き其時呆るる此時獅子も繋ぎ置く羊の群
を曾嚼して飛入りて見る間に一頭を噛殺し一頭を爪にかけ引
裂きたる意外に出し狼藉に参遼さもこそ[illegible]れ悪獣目に物
見せんと言ふが早く三上り獅子の目先に突出でて獅子の怒

羊と打捨磯と眺て目夫々の北天を望むに光物あり似るべし
項を低れ背を張り足翼を拡て身構へる於て吹く風の折
々は波打ち首を擡もこと生死の海於て人こそ知れ参遅も上
も重かるべし是もやはり身を低れ狙ふ隙々鵠の巣離と大蛇の類
此屋の蛇まで鯉の跟をまはしたる猛獣も猟師之を打見る彼紳飯背も
又獣角人等も脅力さまで非ざれど救ふ事もなし唯手に
汗を握りつめ心窃に参遅を祈りつつ畢竟参遅獅子に対
峙其勝負甚麼なるや次の回に説分るを聞なり

第十一回

三猿人夜半に路を失ふ
貳悪党連沼に敵を獲る

却説参遅々耶の獅子の前に昏然と立ち互に隙を窺ひ
雲時眼合わるるに面倒と思ひ獅子も一色哮りしのみ参遅が
咽喉を目掛け唯一口と飛蒐るを参遅早く身を捌き遣遣し脇
腹を力に任せ蹴てんれば脇骨二行打折まし獅子も毫じ弱
ぶる色なく今振向くと参遅が背を八を掻さんと勢込み飛
蒐れば参遅もすい眼早くかと見るとう身を浚まし忽ち獅子が
腹下を潜りぬけ彼方に立る至妙の剽技又も飛
附くるを折さそとれと地上に礫を取り早速の仕方して

狙て遣はせば鼻柱を発矢とばかりに打破れば疾く得堪ぬ目眩き地上
に撞と倒るるを捉へ得るかりと参遊つて いろ〳〵隙を固め鼻柱を尚つけ
なほ幾度か丁々々と打据ゑたるもの獅子も漸く息も出でざるか
まかり世も珍らしき挿きを今迄汗を握りて見る者皆感じ驚き
又やうやく安堵して喝とばかりに誉る声天地も鳴るばかり
中まも獣商人等も喜びとつふつてなほ茶〳〵参遊が前に至り
礼を為し俺們を年来獣を扱ふ業とは大方の其法を知
らるも彼の獅子を亜弗利加より土人の捕へたるを檻に入
れて買ふ者ばかり之を扱ふ術を知らず今日の体裁ばかり毛虫
の長とも言ひつべき程の様なるに膽を奪われおめ〳〵と卿が之と
闘ひ遂に打負はしたるは偏に尚其後と荒出さば難儀料知ばが
あき禍を働きかまはるる御恩を海山なれば忘れるまじ心だりの勧に

○此夜少

あるに申さるやう候べき扨て此方に来たる人と言ひつゝ立て
奥の方なる扣所へ案内する房まと請ふる参遊きこのたびは無益に
俺とともに四の折に仕舞めたるに弓裂ゆんも量られず護身の為
めに為しなるに却て打て殺しなるを氣の毒とこれを思ふれ何ぞ
歓びを聞るべき免や角既に傳取りぬ永き夏の日とはいへども暮て
に程もなるべきに立帰りのそぶりを波緑舵花離をうち
ふるまひ二人も同じく現に劣らず斯く三人打揃ふて出でるを
見て心なるべし必ずや手を賀ん談判を止むを得ざれば連立来つ
暮なるべきに便無るんを果帰るんとて亜弗利と愛年でのこ我家
に残しなまるを心遣ふるれば参遊し商人等に別れ
る告げたるを人とともに商人等を慌て引駐め達路と早出ぶ黄
昏と共尚彊てとめまるれも無礼なるの事を先力なるまれば

獅子に殺されたる二頭の羊は御身等が購ひたるものなれば俺
們がこれを償はんは理の当然なる処なれば是事はこれを解くべし此
は偶ふ二頭の羊を獣帰りのなりし如何は偶やとこれを波緑
船に聞いたれば駄不達慮過なり俺們が既に買ひ
組業の故なり獅子は殺さるべきものなれば花籬見難き中は入り
業なるべき事なれば獅子は殺さるべきものなれば波緑船大人の諭退は又なるべ
合位が言てるる趣理なる事なれば既に彼方
事なるべし素より羊を殺されたる商人達の所為なれば
は此方にて勧めさせる言へるは初の心組なるべ今又羊の償ひと解
むも許さずまるまで是彼陣に費しし愈帰さの遅くもなるべ
れるべ無益の辯論はまて且つ人々の芽志を無なる虞なきは非ざこ
まるまじ忘れ附きなるべやとこれを獣商人達の参遊さるる手を拍ち

て然るべしと同意するまで波緑船は納得し然るべき厚意を従ひ
委しと承諾まで商人等は帰路に出る三人の者は市口まで送りて
さるは秋で分れ者で三人の足を早めて参遊が勇力で称へるべき弟る
程で〳〵幾何も来ずして日は早西に没して天色既に暮れ
ぬと思ふる三人は心も心なるべ暮れぬ間にと出るも思ひて蹴る遅
るるよ口惜き事なりしと尚も歩行るは内で箕ぬ切りて急き
急ぎ程ふ姑なりて日は暮れて折しも闇の事なれば歩行殊は便る
に耳此近傍は山路なれば或は株は躓まつ或は葛は足を絡れ難儀
で窮めるれば遂は路は踏迷れ行くべも行くべも里は出ずして焦噪す
る三人の者は霎時岩根は腰を掛け〳〵なるべまと困じ果て星の光で
仰見れば早夜半とて事異り山氣冷〳〵肌は徹る空翠轉衣を湿
し肝は下は鳴る溪水は物凄〳〵雲間は拂ふ風は音も松で

里の標、覚えそ

ゆるまで眠りもせず生と死とを唯祈々て梟の啼音反ふ
聞るゆゑに是を至て波紫帆背々如何ともせんすべなければ止へを得
ず談合して一夜を明さんと謀る思決め猛獸毒蛇の虞もなんと
出れば燧を取出て其辺の散らかる枯枝落葉を掻集めて篝を焚
き明行く空て疲しなる今か今かと待つれども夏の夜のと短き僅
に二時ばかりして天の白らむ出でんとする心始めて平ら
ぎもやや明るくれば立出でんと言ひつゝ又里を求
心当て直走りて走りて早巳の刻に過ぎられども尚山深き必ま
里に絶て出でざれば牽来りし羊を今か頃る疲れん立駐
て得進まで三人の者も為めなる身体大に疲れて帰ふぬ事を如
ふと口惜く思ふあゝ家の事を氣はかり出が知らんと知ら
るものゆゑ時此処にて直ちんと又もや岩に腰打掛け家に着く

まで力を圖りつゝ又甚飢たれば止て得ぬ弱りつゝ羊一頭打殺し
其肉を食べて精氣力を得るゝ乃残れる羊を促し足の
を行ふ程に一断く未の比に只なる里に着きなる思望
し事なれば三人の喜び大方なるに物賣る家に立寄りて勝手
調へつゝ手ずから食べを与へて何処と主人に問へば年人を咎て威嚇
中の一の里にて美童と云る處と云ふを参遊大に驚き遠ざかるいつ
相互に目と目を見合れ斗なれども偖ては非されば此と山
思ひを敷ふ一つ物を足上に佩樹大人も（佩樹と八既に前編に述べし如く水難
般の名なる時に波難に其妻生を明さねば偖ては参遊大に八之を呼べるれ）
聞ん俄が由なる閑暇に薄情や可措障に遺しやる難儀に
及ぶる家までの遠程に三四十里や有るべんと思へば恥らしなば
ふやうなれども尚鈍く疲労足るなれども家まで思訳なを

やよや急ぎの文ぶみとうよう皆々然せんとうろう外に術もなく亜熱呉に行く路を主人に確と問定め精出る折しもなれ不圖向を見目せで但見る一隊の軍騎なり武具の形状人の風俗問たてもなるき柘樹嵐が手あれば随分兵よく其数たづく三百ばかり煙り急ぎ飛ばし行く波緑脈書が側を過ぐると見なら間もなくせで其隊の兵三四騎が咄と一声かけくるまぐ三人を胸交轟きく思さに我身を顧ら必ず這なれもなくなるこそ驚きて一方なるふたるの驚きて一方なるふたるの驚きて敵中参遅を認なるもなるとなるめ早くもなるも掘めよなる口惜やと思しも逃るなるも逃れ見んと言合さるべき三人の者ことなれば四方を囲い詰めるる敵に向いこそ心得ぬ毒置の形巳書三丈亜熱呉に羊飼を活書とうせもはて細き烟をなる者とうせもはて

○やよや

此隊中なる一隊声を張上げて癖者吐しなせば此我でも見忘れなると云つ出で来る一人の雑兵是則更賛るなれば参遅怒りを得も堪へぬ巳れと云さる飛掛らんとなれども縄を緊ふれて手足を自由なるなるなれば唯歯を噛て巳書如き蜘蛛書を掘めるべき我なるなれど武運も敗る書られん年来日来のなかを思ひなるも空恨め空なるなるなる口惜さを殺せ此怨を遂なる汐書主促が首の上を報をんずと口を仕しく罵るなるなる波緑脈も書花籠も遺恨頻りやるるるなる共に罵るべきなる更賛を呵々と打笑れなる小悪利き雑言を形れるも汐書を此隊で何處に行くと思做れなるこそ在れ大将を是武勇絶倫と音に聞え柘樹嵐王昨日吾料らずも亜熱呉に立入るるるる亜弗勒が隠家で尋得る事を得なるるるる我王に従なるるる此なる掘める向ふな

なもが

なる波緑振が妻愛子とやらん取る刀下の鬼となり殘るハ亜弗勒わ
れ〳〵仕丈三人が京よりも此処へさまよひに來りて早く搦捕し
こと皆是枯樹嵐の大王が武徳の効也所なり委細を後よこそ
吾も是とう亜熱呪て去ぬ急ぎ向ふ所折から夏の日は
ぜ病らな頬れのこれば飽まで嗤る雑言三人共身も世もなれ
ぬ思れ物も言てしも唯其方と眼語られたる枯樹嵐やがて指揮
をく五十騎を選出し三人が成とるをしめつ直ち本陣へ之を送
り行くめて残る一百五十騎の精騎と魅賓を引俱しく亜熱呪が
方へ向ひ飛ぶが如く急ぎ去る

第十二回　病裡に孤王辱を受く
山中に双賊歎を獵む

話頭復前　亜弗勒が愛子が奪を買ひんとて家を一度出ぐ〳〵

次の日の夕暮に至るまで
[illegible]
帰ふ[illegible]
つ思案しつ日の愛子こそふものも、或て腹を巧たりて眠る孝生を
打明さも枯樹嵐が方へ行きつるら殊に告知らしよ波緑振之
の者の帰ふ[illegible]と詳しめ[illegible]
ちぐ〳〵疑心を闇鬼を生ずる習れ御身を迅にのふ無き事まで
種々と獨り胸を思惑し思しるこはるを思返しのれ這
又申〳〵別て仔細を有ん月頃日頃の様とれ野心を挾れの
を非を維哉然ふ[illegible]天命なり今更思に屈さてなりと決然思
定めつも尚甲斐無き凡夫の身胸の有邪無邪頭の有邪
無邪誰に言問れ尋ぬも嘲を違き軒家門の葎をさまと
吹ぬ揺なる風なりて音信るこ色のし夏の日の長志と以ど入合の
ね音さなで騒き茂林の鴉静かなりて遠山の色紫なり　物思ふな

る御身まで見るまで隨に聞くまでは夏も秋の空吹くまでは
ふるふるまで[illegible]まで賞めてもまでまで感じく思
きめるまで[illegible]の賊の学多者[illegible]昔を今まで[illegible]哉
と彼の伊勢物語で撃[illegible]御物思ひ比べてづれ劣りて
無きものまで薄まで住む虫の鈍くまでうと音まで泣く啼く[illegible]
の毛の尖りまでまで露まで[illegible]まで[illegible]暮
色漸く深まで星芒[illegible]鈍く輝く[illegible]止んで
正まで方まで堺まで入る帰りを待詫ぬまでまでも尺丈の胸し麻糸で有
無の答も得知ぬまでまでまで[illegible]要まで燈まで[illegible]
今宇御身を擡起まで[illegible]と[illegible]夕
風まで瞬くまでの危さと知りまでまで点まで[illegible]李の座まで
於着きまで折まで四方噪しく佛まで響く陣鉦の声苛め

まで聞ゆまで那何方御耳側まで聞く間程まで門前まで
迫集まる丁抹人の騎馬兵中まで一人声高く喪家の狗党弗弗勤
まで疾く出でて縛まで就けまで吾まで枯樹嵐王が恩顧の即党
更賞まで汝が此家まで潜める事も明瞭まで之を探置きつ枯樹
嵐君まで勅命まで態々捕めまで向まで家の前後まで迷皆敵軍
飛行の法で得られまで道まで刀の鬼まで其身の罪業消滅
折とまで知まで鎧踏張り罵つる内まで驚弗勤奴
と疑念まで意違まで愛母が訝人しつるまでとは知らで忠実な
る者と思ひまで李名を打明しまで一期の不覚是まで上越まで変やこの
鳴呼天道まで是非なまで日李の苦辛もまでまでのまで果敢まで
終までんとまで思ひまでるやとばまで千金の身まで軽々まで捨てまで要な
き業なれば逃るまでまで防ぎまで詫んと早速の思案まで勇士の謄略御

口頓々馬ヲ駆シメ

佩刀ヲ手ニ掛ケ悠然待ラセ給フ所ニ枯樹嵐ヤ遽テ冢内ヲ
絶テ應ノ無キ怪シ共ト矢サキ指揮シ給フ。簇々発ト踏込キ
其体ヲ見ルヨリ亜弗勒ヲ引ク兵們本事ヲ見ヨト宣ハルヲ
突ト馳迎ヘ先ヲ前ラシ一卒ヲバラバラ斬伏セ戻ル二ノ大
刀一卒ヲ双勝矢ト薙飛ス病中ナガラ勇ヤカ本事ヲ枯中
敵矢ヲ防ク精騎ノ名ヨ恥ヲ雪ヲ味方ノ威厳ヲ踏超ヘ火水ヲ
ナルト雖ト揉ム力ヲ障ル一ツニ逃ルンと思ハヌ故ニ其障ヲ
且ツ踏ム身ヲ動ク手足ヲ働ク毎ニ頭痛ムヤハ
ヲ〻〻雷時ニ成ル遂ニ得堪ズ忽チ撞ト倒シ是幸ト
敵ノ矢ヲ引ク斬ル斬ト縛ヲ解ク筆ヲ載ク
ヨ揚ヲ捕ヲ賊魁枯樹嵐ガ喜ビ大方ル所ニ熟査ヲ近ク
シ枯ヲ沖ガ怜悧ラシ容易ク亜弗勒ヲ掘抽ル上ヲ

此英倫一国ヲ取ル吾手ノ物ト思ヒ皆是世ガ動功ヲ
理義ヲ弁ヲ放逐セ事ノ撓ク遁莫国精緒ヲ
ヤ〻〻賞罰ヲ行ヒ沖ガ国ヲ厚ク
詐物ヲ佩ル太刀ヲ縛ル亜弗勒ヲ尚ト馬ヲ
打騎セ〻〻ト纏附ケ陣ヲ帰ル亜弗勒ガ在ル
御館ヲ任ル獄屋ヲ新ヲ偉距リ亜弗河ガ川流ル石ヲ
獄屋ヲ新ヲ頗ル輪奥ノ美ヲ尽シ己ガ国ヲ連来ル美
目ヲ世子ヲ冊ル琴ヲ簡ヲ備ヲ優待シ
其下ニ国民ノ心ヲ養給ヒ又彼ノ波緑舵参遊事并ヲ
性ル手ヲ枯樹嵐ガ勇ヲ行髪ガ生捕ル約束ノ領主富
次及ビ其子ノ建業誉ヲ各異ル獄屋ヲ納ル一人ノ首ヲ刎
ネ是ヲ是ヲ他日ヲ斧ヲ用ル禍ノ出来ル端緒ヲ

非義の報ひの始めなり。枯樹嵐が初一念大方天に達しぬ。
必ず隨助功を論じ賞を行ひ魁賞をいろ〳〵第一とし東央孝和
地を賜ひ次々我弟行髮ろ〳〵之を約束を賜ひ其餘のもろ〳〵も
地を与へらるる実侍るべき者きろ〳〵記さび看客ところ〳〵客ましね
ろしさるべき要事勅が捕えられ一ことに早晩国中に聞耳り〳〵皆之を
知るもろ〳〵暴に別れ侍りぬる武士の驚愕一方なるべきのるまね
〳〵救ひなるべき御恥辱を雪ぐんと思ふ心の他事もなく忍び〳〵
て河を渡り〳〵石の獄屋の傍りを過ぎ此中まこそと思ふとうかん
〳〵さを思量るもろ〳〵所詮力をいろ〳〵争ふとも鶏卵の石を折れ
る猫鼠の獅子に敵なる事もの〳〵さるべき物なる手出しも
なるべき三歳なるを過ぎ〳〵軍下某生再設不題南幹の里正
なる羅卓夫〳〵養れ〳〵る江守を流石稀せの忠臣肆門度が

遺子といい殊〳〵羅卓夫が家まこの〳〵其体裁を見も習ひつ義
侠の志〳〵堅〳〵頻〳〵里人と親〳〵を結び大義の程を設聞せ吾
人もろ〳〵武藝を講じ天晴成長終るべき亡父の遺志を継受んと〳〵
王を報ゆる所あらんと唯其事のみ〳〵耽れば羅卓夫も密〳〵怒れば常
〳〵励まし〳〵忽ち里に要弗勅が賊を捕られぬるべき又彼
緑服参遊撃の者と同じ〳〵獄屋を撃ぐしとい評判隠れも
なるべし〳〵江守を更ろ羅卓夫も尚一層に憤激し一日も早〳〵
義兵を起し〳〵王を救はるべきと是ぞ日夜忘れぬ苦心し
里人等〳〵ぶ〳〵ふ素ぶ羅卓夫を仰ぎ侍し父〳〵母〳〵思ふの
この江守が日頃設手し大義の程を知るもろ〳〵皆異議もなく承
知し〳〵老壮共〳〵誓ひ〳〵其数殆ど二百を超へ〳〵ぬ此里を魁
賞が領分内〳〵其江守も其齢僅〳〵十五歳なれば〳〵衆

人を駆るまで足ばしなく秋〻時を待ち賊〻異変の所〻折
圖をぬるまばら〻起るまで〻の枯樹嵐〻一箇の賊魁人心之小向
ゆゑ故意と我王を優遇〻御身を害しまゐらせまじと早く
も察〻戒め〻羅阿夫が決見〻江守も現まと諾ひ〻里人
まも由を含め事時起る此見合ひかと羅阿夫が娘ある耶瑠
琳が南人同き勇ましき育ちもの〻江守が様を見〻
義烈の心盛まる〻頻ふ武術を修むる間〻〻江守と諸ともふ
書物道を〻陪獵しらば如何ら〻理義を敏〻本賴もの見ゆる
まば里人を浦て釣賛し歯〻する比〻〻評〻江守瑠琳が聲
ならき〻対の夫婦〻中耶〻耶瑠〻聞〻〻〻

向ひ狩倉なる亡父の御霊に叶ふを心定めなり〜と獨語使者を
遣はす魁賚が方に出向ふを知らせ俄に用意を整へて東央寺
に向ふる警備にも嚴まる人馬はしく綺羅を飾り頗る目覺
あり道に逢ふも聞お面を背き具行列を見るも
枯甚ぶ少なき枯樹嵐より樗〜の畢弗勒が面れこれ彼
們民草に至るまで亡父が祭祀を蔑視あるるより
を仕果しのち如何ぶ膳遺さ〜られんずと獨へて思惟し
ば〜嘆く東央寺の国境まで来られて魁賚を出迎へ城
て一日を過ぎ後打連て諸共に野獣を狩らんとて緑山
と向ひる後の話説甚麿なや分教なる無名果虐漫休持
四首東西是敵矢、谷川の流れてしざしまるるに去る
海まてなるべらんる

竪琴草紙巻七

第十三回　少年雙で二兎を虜にし　衛士欺て一好を奪ふ

枯樹嵐魁賚等を許多の兵士従へ緑山に来り居る驕て
尚ほ用意を列卒を促ぬ谷間峡陰にも騒ぎ〜切
り獣を追出しに思ひ〜弓彎固め我先にとうちとるを魁
賚が心に居る言遣を面白まはの数多〜強き枯樹嵐
数は多〜なれど路の排除に興に入り尚無を促立て山深
く入るなど歩行とろ〜勇ましく馬を用ふる事叶はざれば上得
ま兎一つも在るとてとるるなれば皆々大に望みを失ひ足を労
ばしぬとつぶやきるなるもと来し道へ帰さんとする折しも行の目怨

後方で声高く待ぬ枯樹嵐こそと呼ぶ声あるに打驚き何事ぞんと思ふる間の刹那飄然と飛来る一箭悍ぶ左の眼に間差とぞ篠懸射込む一撃所の重創何ぞ之堪得ん生死を知らず倒れる海賊是を聞く兵卒殊に甦賓愕然と驚時吊る程もなく山の洞穴より悠然と現出でる一箇の少年但見る齢は十六七身に白地なる衣を着け脚に一口の大刀を帯び手に一挺脇挾める打物を引ぶ威風凛然たり出来る者は出来る者は癖者逃げと更賓を初め将士の面々唯一人と易りて怯たる為めに撃ぬ尻目に掛け彼の少年見向も遑なく一人々々侮無双の甦賓なれば七十一年世がらめる火を放れ遂に枯樹嵐の城に陥れ無敵の最期

を遂げぬ時吾々十四歳母と共に門度が子江守に同時吾々十四歳母と共に

高矢を掲げ大刀をもて切り伏せ切り捨て

と共に参避を促すと共に甦賓の語を継き落行く師は追蒐く柳弟澤も追付き唯一網と思ひ参避無雙の勇なれど数多の敵を物ともせず敵陣に見て苦草を早く斬殺し敵吾も妹も殺さんと賛蒐り落ち時不思議に驚め接で得て敵を捕て死なんよりは生き正道守りて父母子孫に見天の冥助を顧面吾は存り罰を顧面汝等は在ぶんと云ふる知らざる敵を曽て口惜しく少年が口惜しく似而非雑言其合槍を以れ兵側と云ふる兵士のとぞ云ふ斬倒さんと打向で守りて日頃精神を賞勵ふ鍛錬の兆を是を悟りて刀も抜き今で冷笑に愈切過ぎる其賞懲芳志を承れと此工夫の嘲哭合ぶさぬ海賊大海賊枯樹嵐を隷に親兵を遣に可笑と乱

刀を下に掉抜け潜る隙なも嘲る不敵の廣言こなる〳〵せいと急立つ〳〵皆疾く掛つと此悪童を新撰組と敦圍々々唯一人の少年を敵手に取る戰に射倒されて枯樹嵐にて守る者少なくなる陣に顯れ岩陰の草押分けて忽然と又現れ一箇の少年是も其歳十五六曩の江守に際超と目立つばかりの艶顔嬌態なれど其性猛々しきまでも身裝まで〳〵と凛々たる矢疵ふ佐〳〵枯樹嵐が側近く寄来りやよや奸賊観念せよとつけも訪で守りある一人佐兵衛手に取ると見る間に一般と投飛だし早枯樹嵐が脾降に取ると〳〵残れる矢をとり仰天さるるまでと頭人の角きて逃もなれば詰方なく皆諸共に籤を伐各佩る大刀抜連れ均く撃て蒐り〳〵る刃の光てさわぐは雪を凝し〳〵遠山に映る旭日は輝るるに見る目眩きやうなれどかの

少年も如何に臆せば又何事やらに比べて婚然笑ふて枯樹嵐が側に風と立向ひ是も刀を抜ふ立向ひる体裁正ふ是れ白鶴が雛に取ると謂つて雄子と挑むは殊勝に臆まれと打下る幾口かの乱刀に或て飛超へ身をかも陣に見透し一人の刃持つ手に捻上げ背の方に廻して一押おと腑ふに倒るるなれば枯樹刃を奪取り好陣得りと打込人ぶる敵に見るるに丁とはう受ふ荷に又うつ大刀ち鍔際発矢と斬り込ふ鋒先にこの敵兵し何ぞ支へ首筋深く斬込まれ忽地大地に倒れ打つ現に悪主に悪僕と此て〳〵に見るとも残れる者に雷時も支へで思ひ〳〵に乱走し主を扶る者ふ少年得ると枯樹嵐に走寄り足に飛でし頭に丁と蹴返し〳〵振〳〵帯側無手と取り程に近き谷の方ふ

引摺行きて突落せば二言といはず谷底へ身を飜して落入りぬ
と愉快き事なりとて魁賢等自餘の士卒も江守と戰ふも
なほ是等の事も毫知らず尚し江守を撃ちんとて頻に聞く
折しも誰とも知らず後方より珍奇なる声音にて
喇其必なる江守大人已れが由縁ある者なりと枯樹嵐が魁賢とて
よ此山すも来るとて大に傳聞はるべしと一臂なると
貸参ふぬと思ひて既に射めんとせし枯樹嵐は谷
のうちへ投落しつ暫まし甲掘めれば伸びんとせし
それも魁賢一人自餘の端武者は目を掛けず勇めて捕はんとせし
已もこれをうち進むべしとなるまで驚く敵兵殊に江守も尚驚
き何ぞ心を黙頭て黙し唱が枚接精しき事なれと以ま
り量ぬ程なる大刀を引抜きて魁賢を目掛けて敵中へ

衝入るとて敵兵も今此後なる美少年が早枯樹嵐を生捕りしと
聞きて忽地に棘とぞなりて呆れ果てて所詮叶へ
じと皆言合せるが如く我先と魁賢も今は逃れの所と思決めて阿容々々と大刀投捨てて大地に
平伏し二君子之を見ぬるに志を憐れみ命を赦すとせんか
しと拝まぬばかりに泣きぬれて江守等二人も冷笑ひ思知りしら狗
虎の奸賊なれど今は其時なれば命を許して得させん
旦早縄を受へよと以つて懐中搜探り縄取出して特と
なめ然る後に江守は那の美少年に打對れば身の来歴唱が谷
素生語りも語れしまかりとて問詰の席に非ず唱が谷
に落せ給ふ枯樹嵐が事も氣の毒なれば唱が是とて其父に行き
事の様子を見ぬるに又吾儕が手兵を護の方に待ちわび一先吾儕

[illegible]を行き安否を知らせる後より迎ひ来つべれ俵も俵が
[illegible]様々に驚くべき事ありきと云へれ少年報然と云て羞
ふる氣色なく微笑なる答るやうなる枯樹嵐が事なるき
[illegible]待[illegible]間に脱落ありて保ると実否を見れば気遣
[illegible]仲を隨いて踏を待る残兵の有りと料られば申れ
[illegible]男なる由断をしめ[illegible]江守も打点頭よく
[illegible]附められ吾儕でなる[illegible]
[illegible]後[illegible]も[illegible]
此少年も行度[illegible]行[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]行き安否を知らせる後より迎に来つべし偖も卿が
[illegible]様なれば驚くべき事なりきと云へば少年報然と面
[illegible]色なく僅に微笑するのみ答へるやうなる枯樹嵐が事なきを
[illegible]脱落なるべうも候へども実否を見届け気遣
[illegible]仲に随いて路を待る残兵の有りしも料られず申さ
[illegible]男なる御断をしめしたれども江守も打点頭よく
[illegible]附めされ吾儕ども用心の為なり
[illegible]も用心の為なり
[illegible]後まと云へども擒の方へと行らで見て
此少年も行方なく後より下行る男〻
[illegible]引連れつつ擒の方へと行らで見て
[illegible]枯樹嵐が矢疵
[illegible]相助へ[illegible]路を帰登り擒の方へと急ぐ程に江
守も少年と袂を分ちる後を直走る路を走り稍擒に到

まして見るに待ち受ける里人二百名ばかり這は安堵すべし
と愛なる山中首座も甚麽なやと異口同音に呼ばりぬ此方
迎に来りたる江守なりとも知らずして
々と山なる首座を語短く物語り
なんと促せば里人等一議に及ばず江守を中に
守りて山の奥へと進み入り行く事すること幾何なるを忽ち向の方より
江守が噂を聞きて伴載に弱なるぬと美麗き少年が一人の
疲員者を引連れて手負ひ者と共連れ此方へ指して来るなれば
と江守を報れて江守ていそ〻と迎へ雷時甚処より里人
駐まるしめ〻少年が手を取り其虜なる礼し思掛なる卿が
救援暴なる急死の折とそれ卿が呼ばるるを時なるも名を名
喝りぬるなれば偖も吾儕と挙して卿が名をも呼返さば唯黍き

男子とばかり思えさせる眼もて
吾輩が味わう美麗さ比べるものなし
やと問えば変麗低かりはあらず
頭でやうやく撞ぶつ言語静まる答えるべう幼き時ふつれ
く迷う面で見ずとも再会折を得ず早く眼が美麗なる
と認めるまつて血統の天縁尽せぬ処の侍らるる折眼が驚く
捕去れの内ちう生き悲哀やる願わく繋き甲斐ある玉の緒
も絶えとばかり虎無き海へ飛入いそや敗う藻屑と消も失せ
べうし折も折とく勢く通りかかりし舟人へ救えれ
ちう詮方
なく又つらつら思見るつつ一旦は死すとて国家ちくめ
なるとなく亡父母ちの御名を汚し此身は
年と生れ甲斐幸ちまう似れども英倫結ばれる男子と異な
る処も[illegible]是ちう
雄々しくちう天晴枯樹嵐ちう

雄賛ちう君父の仇の一人ちうと撃ちやと思ひ救えれ人許身
を寄せく退て見ちくちうて相應しらぬ業ちく武勇の心を雷
の内く一年二年と送りある去歳は至りく其人ちくの物故ぬ
ぞ乃ち心を決めて亜鳳河ちかちう亜弗革王ちの在ちもく救れ
まるせんと姑く其処辺を徘徊し便宜を求め待りしく守厳ちれ
ちしなく遂に今年とちう為くて雄賛ちくて枯樹嵐ちまち此国に来り
得た飢饉の食を見しく狩倉ちとつふ風聞ちく寂然渇奥ちの水を
緑山に分登ちう山の様でとくと見ちく山の谷ちの傍こそ忍ちく
寂寞ちる所ちなく出立し
ちる塚（第五面で参考ぶし）に至り
尾ちく敵を獲く王ちの蒙塵でも免れまるを御父君が怨でも晴
復讐ちの事を聞上で何卒首

らぬ人のうらと祈念しえて立去りつ枯樹嵐が来るとぞ今か今かと待暮し遂に昨日此国に入りしといふ力を得せる様にてなるときて萬に都合悪うと豫ねうと少年の姿頻りに知るしうの方ち身装でつやつや彼山の岩陰に隠れ忍び彼奴輩が入来るとぞ待設へ今や立出戦をんうと霎時踟躕さるるかどに忽ち彼方ち江守と名乗り出でうる人のつるつるもやれうと思ふ胸すつ曜ぞ霎時も出しえやうぞ待ちかねる其人題賓と物言ひうる言を聞けば疑ちき兄君まて在ますこそ全く亡父君が御霊ぬ動き所よし哭ち心嬉しく見れば賊魁枯樹嵐ハ早ぬ射殺さんと守る人さつる助れぞ嬉しつる打喜び随助岩ぬ陰で出て直に枯樹嵐と合に落し敵の奪ふる阻ぶ情こそ胴に声と掛れ是始末る事年頃日頃兄上ぞ在ますと

唯一人思ひぬれば寝る間も室に現れ甲斐なく待ぶねどはりうき夢と命とめて思細りて見待りとも今ぞなお此この解迫いと嬉しく待るる敗る賊魁二人ぞ生捕りれば胴と我大王ぞもづと波緑瓶達雷次大人父子を救ひに行き給のはんに幸も同じく此浮まて俱しまるせ思ふる胴が御心甚麻ぬとい以ぬ曝ちる降うる涙を密と拭ひて女子ぬ様と見えて勇まるこれ兄まて此妹に得難ぬ者たちと思ふぬるまで皆感嘆ぬ外なぬ聞居る心て同じ兄江守うる涙ぬ眼を屠敵き敗う當ぬ敵ぞ得おいう兄妹再會ぬ意外ぬ出ぬるちぬ嬉ぬ昔迎で嬉ぬ事し後失る許ぬ通ぬ事ぬ聞ぬ人とて昼ぬ鷲ぬ掴ぬ神ぬと

と崇むる謝の情を置つれ事羅阜夫を救されし事并
に其家を養くれ事一伍一什で物語り其言うりてまゝ
さるべき吾僧も俱讐ゐ志願此に休むるゐ是等の里人等で
つるゝ〜事時時で待つ枯樹嵐此処を来るゝふ噂で村
で聞しゝ飛立つばうを打撃ば弾を其日狩倉ゐ興賛
連立出るゝ猶更ゝ事ゐ隨即里人を縛趣位々と言含め
ゝ皆々同じ〜打連れ〜朝疾〜此処を向いつ遅まゝ父君が
墓を詣で墟で山を到着し其処を里人を残ゐ山の嶮峻なる場
まで敵と戰ふ目論見なれば勢を味方で連れ戰ふ人折
ゐたるものなれば〜可惜し〜壮佞で殺ゐ人事の本意ゐ
ゝと思れば機を失ば〜敵で捕得るゝも儀を下ゐで逃
得つべき為ゐとゝ待〜せゐ洞穴〜身で潜め敵此処まで

来ゝとゝと心を祈りつゝるかど小男〜枯樹光等で興を乗りか
しゐで来るゝ〜ゝ故ゐ我も知らねと其処を黙ゐ
見えるまゝ〜引返さんとゐ後の始末で助し知れば語絶ゐ
接濤ゐ国ゐ行末ゐ国ゐ味方ゐ救れ出し〜此国ゐ
直ゐ威塞を進向れ和王其他味方ゐ里人し美麗も立ち
城傍で詰るゝれと立で里人し美麗も立ち
失里人を親附の辞で述べ〜睦門度が塚を詣で是彼
ゐる日も暮れ〜日里を立帰り羅阜夫等を美麗で逢
せで其喜も一方ゐ〜慰め且又勝利で祝きゝる浮々
ゐれで者きて祝さば翌日ともゐ〜各腰戰粮で用意しつ
江守美麗兄妹で里人の固強ゐ各駿馬二疋で得〜れで之ゐ

打騎り立出るに昔柳亦擧すく難賀を追ふに及ばず時を
坐して思出さん今を得失地を易して切てこと勿れ思ふべし何
きびしき風の冷かる道を首尾ととゝ帰来人日を待つ
こと送る諸人諸走を師まるに堪へず進み行く国を報ずる一片忠
て堅き石弓や岩をもとかれ勢て とうけ大刀はなちわれ
岩ぐゝ切名〳〵帰るばうと大夫が義を勇ましる旅なれば
思ひの外早く来て此日は夜半の比なれば風雪を看て
雪日其屋 明行 宮中 神樹嵐 初
銀山 宮中 [illegible] 宮中 [illegible] 加
嵐早風雪て雪守〳〵る行髪が必ずも山てうし珍事
[illegible] 頭末逃帰りし士卒皆が逐一注進しもれ〳〵行髪も
[illegible] 果て詳方〳〵て鈍くも唯士卒を整て居城を楚と守

ぶせつゝ守るのよせのと近臣と談合ばうるなれば江守皆が一
隊を事もなく威塞を国中を入るまはて出る亜鳳の河を沿
い要弗勒が在去れる獄屋を側を辛りつて静て獄屋を打囲み矢
屋を出と呼ばりて門打破り乱入せず警護の武士大を惑がこハ
狼藉なり何事なこと偵候なり何者なとうて江守皆聞の
で宮口敲きて叢蜂の準我儕之人を東夷の領主なり一臣
曙門度が子江守と美震なり昨日題賓と枯樹嵐を緑山て生
神なり隊後を簡摩なり〳〵今を我王が御恥辱を雪ぎまゝ
さんと者れるを尚の勝を開ぶ〳〵〳〵なり〳〵〳〵目を物見せんまゝ
此侍図を見とりしと〳〵なり〳〵隊後を摩なり枯樹嵐題賓を両人
で側を初手を手を〳〵て警護を武士も吊るを〳〵今を抗拒を氣
力を失せ〳〵〳〵誘導を仕り〳〵亜弗勒王を返しまり〳〵誘ぬ人とい

[illegible]江守[illegible]拍樹嵐[illegible]興賚の二人て美麗を豫[illegible]て外[illegible]
る待[illegible]しつつ已てれ有人の[illegible]て[illegible]やて門内を入るかを中を
守護する警衛を思ひ[illegible]を少なる[illegible]江守て導入れ[illegible]
七八人ちもちを外まて[illegible]を見えるを[illegible]を心窃を怪まるを驅
て獄屋の前まて至る馬て下りて帯勒が出ぬるを待つもちて凡
を半時て過ぎぬれど絶て出も来ぬるを心大に焦燥て警固
の武士を疾く〳〵と促しかれど應をなきぬを偖も早くもわが
来しを王て何處を匿せしを思附てを自分を[illegible]
て踏込んと尋ぬと面色変て立上るを見るを警固の武士
を逃れを逃れを[illegible]と呼て[illegible]て各垣を乗越つ外方て逃るを
を江守を辺地悟得を幸なし里人を打向れ皆々是て何とも
見るを是を獄屋を我王て幽[illegible]まるを遣を[illegible]警

固の武士まて思罪はを我等を見るを王て何處へを
連行れて守る者の数少なを[illegible]を我を疑を[illegible]と思れ
てを事なるを[illegible]まて[illegible]を西弗[illegible]大王が此獄屋を[illegible]在を[illegible]
誰を斯く軽佻く垣を超て逃れんや何處と定を得知れ
ども行髪が守りを城を[illegible]を多れて十が八九が其処へを
行を時猶避を[illegible]も追蒐を及ばせ[illegible]を
と〳〵と促しを事理明白を推察を里人殆感服し門を
出れを[illegible]を美麗を[illegible]め里人を侍固も影を[illegible]を
只其近傍ふ斫ふを警固の武士四五名と里人三三名はを[illegible]め
きを[illegible]を倒れて居を江守等が来るを[illegible]を手を打振を[illegible]
ぶを皆々[illegible]と打駆[illegible]て何故[illegible]と苦しを[illegible]
て嘶き江守大人其外が門を内を入りを[illegible]を幾程も[illegible]

より只見れば獄屋の邪方なり警固の武士ども数多添へて怪き轎走出て邪処を見ゆる行髪が城の守と馳行ぶるは美震の君なり訝りぬれば此虜なる兵們が今吾僑が手りしなり加勢なり行髪が方へ行きなれば又轎の内なるもの誰なるや

なるべしと怪しきなりと此処を去なるべし轎を追奪べきなれば上が出来ぬるべし如此処すれば見のがしなれば手勢を勘し心細く思えんも残りなるべしこれいるまじんと決めのねば見えまじ折なる忽ち横方なる警固の武士が隊現れ聞もなるべし味方なる中へ無残とばかり衝入りて見るべし中を割通し甦資を一人奪取り是も行髪が城の方へ打揃なれば馳行なる疾きことさながら颶風の如く其隙瞬なるべし早きを美震の君を勢然と鎧を驚て声張揚げ枯樹嵐奪されぬべしと邪奴を阿容々々奪されて

ならべしなり此虜を去るとも詮なし皆々追ね枯樹嵐まで亦奪されなと宣ひなるべし馬を拍れ真先を進て追のべ皆々之を力を得て後れを出なと繽紛なるべしと覚えなる初め敵兵横方なる衝入りしとき小可者なるべしなるべし所伏されこそ倒れなるべし候なるべし保なるべし事なるべし唯心なるべし励まるべし知君が来なるべし待なるべし其甲斐なるべしと嬉し今死なるべし根なるべしと思なるべしかつなるべしと心なるべし気なる捷き晩なるべし息なるべし絶なるべし嗚呼此里人なる唯一箇なる田舎漢なるべし然なるべし其我なる勇なるべし死なるべし根なるべし潔なるべし現なるべし王なるべし此国なるべし一つなるべし江守なるべし副なるべし因なるべし仁政なるべし効なるべし高なるべし国家なるべし恢復なるべし計なるべし他日なる隆盛思なるべし

第

堅琴草紙巻七終

堅琴草紙巻八

第十四回　計て失ふ美震なのづから便を得ち機を乗りて覇徐ゆゑに功を奏す

江守の事趣を聞き多く一人驚きて素より多才なる少年なれば心を悩ませ侍りて今里人が怠々と告げ知らせ息絶えて泣き叫ぶ思ひなきを毛髪立寄りて事成り難く日を重ねて恋厚く妻子を養ひ此由を手まも聞えず誠心を躍らし繰言し涙ながら向辺なる土を堀せ埋葬し石もて扱ひ折とく組み形ばかり見る者なく感心年を似氣なき心掉来頼みと思ひて厚く里人を倶ま袖にて潤ひ埋葬果てて江守の里

人々打向ひて云ふやう皆早既に聞伝る如く美麗が敵と追蒐へ行き又此獄屋なるこの方に怪き轎出でしと云ふを吐紡れしなる事勤王が来るものなれば敵に送るべきなれば

さきだつ時移りて今更追ふも益無様なるまゝ美麗が隊の方に敵軍賛蒐りて枯樹嵐も奪はれて免て逐ふ

大に失ふ諺に増す悔なんぬ枯樹嵐ぞ這方なるべし是樹なる人質なる我大王の御身なれども迷在なるもなるべし彼方に進めと云ふも影も見えねど心当て美麗が跡を追蒐つ

姑進行くなどふ只見れば西の方なる一隊の軍兵見えて

で那れて何者と馬を駐め眸を凝らすに望む間に那者現れ馬を走せ

近づき来る間近くなるまゝふ中に一騎の武者現れ馬を走せ

進来るを江守なりけり打見遣れば是即美麗なるまゝ目喜び

目詳りこそ美麗嘶々暴ふ魁賚を奪はるるしるを追

蒐へ来しと云ふを今々悠然なる様にて思ひ奪返し吾

僻を通ぬ人なんと変き事なるべ後詰の敵なるべしと

美麗なるべし恥入る面色にて今更なるべ恥しき縛

の様子を知りぬるなるを思さるるを理なれど先通り聞召せ

事の先なる女子の詳き心を見透しなる上方に油断なるまゝ

なる横さるなるを突入れし敵に魁賚を奪去られ咄嗟と思ひ

人々と共に追蒐侍りと云ふ重なる運も蘆筒の一重なりや三重

四重も救なの敵に囲まれつなるべ又も枯樹嵐を奪去られん

と云ふるまゝなるを奪ふ事なれば敵に物なる事なれば遂

に五六名許れを引連れ敵奔が入来るまゝと見る間なるまゝ

なるまゝ彼奴を引御ぎ造化精妙と云ふも早隊中に取囲み尚

奪る教さんと揉て揉で攻侍れば味方きづる撃られて今ぞうよと思ひる折しも誰とも知らぬ西妻を救ふもあらばと敵兵此方へ色めきたれば這ぞ此方に又上が救ひなるぞしと胸を撃て待りしを思難なや敵中より猶現れし三人の男子の中より参遅さへ存ず御心強く思召せと呼ぶ敵兵を駆悩し衝悩ま〻奪ふ枯樹嵐魅賚も奪返さんづる敵を奪ふ賚れ夢の夢の夢を打見る心地しつ唯とまれと小防ぎ戦ひて敵終に逃走るを今ぞ参遅めづらしやとこそ其身を進めも〻奪ひ救ひ礼を後に枯樹嵐魅賚を奪ふ賚が只の同ぶき面目是近の救甲斐〻奪返しるよと敦国の参遅莫用と打笑ふ其儀心御心安りの敗て亜弗勒王を撃ひ雷次建業の大人

あるも最早獄屋に在しまはで少可事あり如き危〻侍因を免れある由縁を後に残し申さの目れ姫上が等閑を侍因を奪ハ如ものなれば只君を面目に向難き候ぞ此なる二人あるもの人と其名を彼緑舵と小可が兄と一人を花離と呼ばれのに亜弗勒王が近臣落ちさせ〻時なるも俱なれる刀補に候を給へ大王をぞめ皆々を待設ぬるの誘ひとい〻も馬あ皐頭引回し導られて せんと彼緑舵花離二人あるものも救ひるれを迷べ驚と耶方を止まる隊勢のなる必に住きて嬉して大王を在つ其餌馬沙の領主なる王あ中智覇録大人約束あ領主雷次大人并に其子建業大人其他件年我王が解散をめのなる諸将士達を一人と〻集まるばなる〻雷録の大人が率来りしまはい

ふさわしき王の御味方の数と将卒逃散すると之を奉ずる者
里人を加へて無慮二千人ばかり近く斯くてやがて候使も指傳
へて待ちぬ侍ん尚此外の委細事を申こゝまでの大
王嘶く待ぬ来りぬと奇々妙々なる詰設
を江守の脾を入れ抜き出すべきを天より喜び地より笑ひ辛苦仕のばしと
我大王を敵兵より遠ざけらるゝと憂慮しつゝ郷へ気遣ひ今
迄早き心もなく進来れば為なりぬ思もらぬおろこびれとろこび
何ぞ比べまし現に参遅が比べる妙く侍因を敵に奪ハレ室
く郷が罪なるべきや吾僑人が辛うく
彼奴等を人生捕りつ是を陣頭に押立て敵の胆を拉ぎ我王をも
雷次達を救ん抜ん思ひも其事殆成ずとも乞ひも王女
救得ぬ却りく此方が救ん抜ん為ぬ波緑般参遅事に此方の危

難を救れつ又我王を早取に獄屋を出でく自由なる御身となるべ
ひなる造化の妙契奇なる哉我大王待ぬ
なるべきを遅々しく時を移さ人を臣下なれば本意なれば
拝謁と里人を見返るもなく里人も美麗の詰を緯由を知ぬ
誰ら勇まざらん譬へば枯草の雨に遇れ孤客の宿を得たるが如く
皆欣々然として江守美麗を引添ひつ驩くも出し面やつる軍ふ
到着しぬ美麗を随即走入て王に聞ゆるなれば疾く
疾く是へと御前に召さるゝ江守を勝行頓首
平伏なれば重弗勒曩ぬ江守が進来る時に面をつく〳〵と
しるるもなりぬ今万乗の帝王の前に出でも怯めらる色なく
礼譲にも失なはぬかと感服しの故に現に天晴なる性が江守い
血縁の縁の事なれば年こを今に少年なれ横顔と俯伏なる面

正しく曄門度々憂ひ差遣しなまじひらに身の挙動とゝのへ心とゝのへ
なんぞ父に似るこの形やよこれ江守美麗ひの世業二人の齢
まだ高らぬふと奇しくて父の遺訓を迭ふ忘れず朕縲絏の辱
なれば雪がんもなと思ひる心ばかりの有難き江守が獄屋の門口まで
高く名乗りつ警固の武士と駆りしかる形ばかり朕も親しく打見
なる情勇ましき少年と思ふ科ばに此度て逢ふ事なれ世業
二人ともに枯樹嵐難賛両人を生捕りまる国ぶるまて仇まて
思ひなるまじらし尚此後も氣を注て朕足ぶるを神ひなと恵も深
き御言葉江守美麗二人ともに涙を零時の物
言ひ得ぬ情姑まして漸く江守て涙掻拂ひ傳ふ頭を擡ぐて
勿体なき仰言なるぞふ當り奉るまき素ら先臣曄門度ぶ紋ふ
臨ん微衆ば程を説教へ候しも身達不肖なるなれ心ばかり揃ふて

辛く生て捕へる枯樹嵐業を取逃し一枚ば功も建てぬ
恐尺ま接ぶる事を恥ぶ候ひと語静ま声低く答ぶて
る明雑ば家然物ま動ばる人とて及ぶ者もなるぶ並居る將
士兵卒まぶ感せぶるまれなりば姑ま要弗勅て語を継ぎて
宣ふう愈語ぶ姑ま功ま誇ぶぬ言葉ぶ光
美麗まて姑ば鑑まこれと姑て雲間とぞう打笑ふ
るば覇録ば勲功まて初め朕獄屋ば投ぶて知ぶ
出ぶと武士て責めるひとま武士們ばるま訝せ朕と問ふ勿
四五十人ばやう佛ま部屋ま寄ぶ心嬉ぶ押据ぶる轎ま乗
りるふ後門の方ま撞ぶて行きぶ出ぶ走ぶ断
ぶ悟得ぶ情ま江守ま歎きて朕ま奪取ぶ行髪

方より送りとどけ来れる書を見るに江守は早く氣を注ぎやと思ひ
始めて詮術なく阿容々々早行人程より伴は四方騒がし霸
録が声とて武士們雷時待て我が馬沙め領主なるし霸録は
疑ひ入れ日外主は別奉り何処にか在るも知らずして唯好便を
待つ始めなるしと往る今なる我主を那処に捕されの由人傳
なるべで聞くもなるべ如れなる旧主を紛合し時を俟つ事妄は三
年天運いまや開きん人節は死せ睡門度が手なる江守と姉
の美麗が事兵を起し機は集じ枯樹嵐興費を生捕りつ早此
国は弟なる事定なるも知られずして隨助盈同誓死の士達
と倶は起て雷次父子陸緑脈参逆花籬豊が立なる狂屋は出
入し容易く救出なるで一先ずて息を納れ江守豊を連て
後に主を救出しなるべと知らせなるべ怪なる

輪出しを見るるも我主を載せなるべ一と見るるて
偽眼は為なるべ鮮むら抗拒なるべ捨行く
なると敦圍置れるべ雷次父子陸緑脈参逆花籬を為なる
名を唱つて否定の返事甚麽と待構へし様は敵兵胆落なる
視拾身は除て他寝は偽なし此輪を捨置なるべ命を許
さるべなるべと手を合せて乞求むるは霸録を面を打げさるべ
世事は用て無しなる逃帰りて此由を行髪は傳へなるし
と聽て是を宥遣り眼を遣り扶出し迷の口上なるべ尽きば
對向は当り隊の兵なると見る間もなるべ又隊現なるべ
を追蔓なるべ那なるべと見る程は追なる方を
打様人勢追なる方を何明なるべ豫なるべ人の噂は
聞なるべなるべ江守美麗の陰なるべと早なるべ思なるべ
陸緑脈

参遅花籬さて進み出で云々と言上しさてこれ兵子引連れよ
まて甚陽の難儀を救ひよ是も美麗が陽すして美麗も三人よ導
られ吾目前よ来りて手柄をすべし人は
一度又驚きぬと一伍一什で後ぬよ江守も萬便とて衆戦一日
よ相曾せ〜と年〜運の開くる処と心ゆ欣喜一方ならず程と
く雁参るかどよ側よ扣へ霸録を上へ〜坐をわ左人口
傷しく江守が顔を打笑ふちぐ見遣りあるこの後う霸録
も将何事でも言出る外なるべし下回まて解分るを聴ねらし

第十五回

城を築きて諸将よ根據を定む
琴を弾じて英国王敵情を探る

當下霸録がいかうさんが我儕義心ゆ者を糾合しかるし場処
しつが沙馬塞ゆ国内ある亜熱令てふ大沼ゆ中ある一つの嶋

ゆて根城を作る宜敵竟るゆで此處よ一先退きて敵と戦ひを
思ひて主まるゆ左ゆそとうるべきと宣て衆意を問て
ゆで過ひゆで今之でも告るるべ
き〜江守も霸時考へ口吹黄き某が諸君子達ゆ意見の聞て
きらしふだ〜ゆるを申みて敵竟ゆ及ぶゆ処ゆとても竟
敵地ゆ一ゆぬるる〜縦僅ゆ
るべき処ゆ知殿が宜ふ所〜某処よ根城を定ゆる
こゆ事よ取り〜て利益ゆもある筋多〜候めれと云ふ霸録
も打点頭さ〜ゆ左ゆて整ゆ和殿も既よ来しゆて此処よ長
居て要ちり日も早下晡ゆる此ちう直よ往るべき子和殿が集
め戦兵ゆ悉輩淳て拝謁さ〜ゆ江守ゆ有難し
と承諾して遂那方よ扣へる男人を来ねと手を挙げ霸録

身を餌にする恩命を里人に知らしめ進ませつゝ
[illegible]を[illegible]て西軍勅使等正丈の身をのがれ尚なを大義を
辨別し奇しくも義兵の群を入れ一臂の勞を尽す事神妙な
る所なり此後も尚志を接めて忠義を尽しあると江守を以て言
葉の端に里人を感謝の堪へざる容易なる仰ぎを得ざるべき
天顔を恐尺しまゐらせのたまはくこれまでは難切なる詔を賜く
はる恩を受ける身の幸福より移り聞ゆるなり と答ふる語を云
やうと江守に聞上げるる事畢て後諸共に沙馬峯を打向ひ
やうやうと出発し日なるに到着せるに隨助人夫を駆催
して西熟令沼の中なる嶋に堅城を作しめる四月は
なりが程に内より全く落成しなる抑此沼といふは名を聞
えなる大沼なるに我国の仲幡沼唐山の昆明池なるも類ひつべきも

なれとこの中なる嶋は

嶮岸高く聳へて滿島山勝なる風光甚明媚なる湖面玲瓏として

高きを登りて打望めば
嶋を繞る銀の環のなるかと思へば水晶珠とも
限無きに蒼空を呑んで
一行の烟を迷れ白鷺書下りて一隊の奥に散らして朝霧深
く立籠めて日影を悩む時なれば夕月薄くなれと暮
簡に霽て折しも春秋夏冬晩書晩時なれば移るよる
絶景をなんとも屬へ難し
し新城に今一層の様を添へ画龍点睛於兎角翼形壁白く
聳へたる嵩を豐へて紫
此方より望めば影倒に水に映る周囲を自然に堀り
天晴なるに於て見えたる閑話休題に題枯樹嵐魅貴の

多く要弗勒を守護となる警固の武士門を敲き入れ館を焼き
きたれども枯樹嵐の如き八眼を穿て射るに頃まを所を
得離れず療養一月有余にして漸く癒ることを
甦資の如きを別て痛く賞し所の者に厚く
と壮健なるを以て甦資の屢招きたるは我此度無
人なと枯樹嵐を痛く之を怒て遂に城を召上て又々追放され
うれども甦資を再因幡に這回て最早詮方なく要弗勒に降
参し雑人に仕へ説附へるを彼方も人を要むる折なり豈喜び
て承諾せざらん然るに思寄らず縛られ使宜と日毎日
毎に窺に居るを不敵なる甦資は枯樹嵐を一度に守護等
兄妹を捕へられ殺るる程に枯樹嵐を一度に守護等
で潜て奪に去られる事なれば要弗勒を初めとして其他俘囚の人々
墳を得も堪へず是より五六ヶ月

処に
なる程に切に砂馬塞に押寄せ屢要弗
勒と戦へども彼方の忠義無二なる者の集りなる由叡慮なり唯其
勢つよくして降となれば足ぶされば續様なれば
うしくは勝敗見えず其内に弟なる行髪なる取なれば愈集
煙程に紀元八百七十年なれば七年と成なる是時枯樹嵐を
引上げ假に風土舎なる中なる蒲栗斯敦と云る陣営を作設け
李城に二三名なる配下を守らる日なるに要弗勒が
攻来んとなる噂なるを待受なり居られば砂馬塞なる
要弗勒なると知なる君臣を召集て宣なるは皆々何とも
思ふやん此身獄屋を出づるに日夜恢復を謀りて戦
ふ事多なれども毫なる其効なるを諸国なる関
を設なるなる此城に在る処なる千有餘人を降なるの外なる朕が味

[illegible]月日を曠ふ[illegible]尚賊勢を盛ませ[illegible]
[illegible]を噛むも悔[illegible]
熟考ふるに頗る危き計[illegible]朕此姿を酷く嘆し止[illegible]者[illegible]
き負に好ふ[illegible]孝[illegible]事も[illegible]弾琴者[illegible]体とろう[illegible]目
人に打拐[illegible]敵陣に退[illegible]其機密を探り上に忍出て忽
其用意を整へ皆々と共に撃[illegible]捷利を得ふ[illegible]必然ふ
[illegible]一撃に賊を平らば社稷を恢復し得べきならし婦人[illegible]
仕[illegible]徒に陷ふ[illegible]朕を妨げ止むるもなく相ふ運も不運
も皆天命固に繋がれしとも天運[illegible]尽[illegible]
[illegible]永[illegible]たるも[illegible]目
り特むに足ら[illegible]心得ふ[illegible]と例ふ[illegible]意表に出[illegible]し御言葉
に皆々感角の思寄もふ[illegible]應もふ[illegible]ふる江守[illegible]

[illegible]君子と

[illegible]敏捷に進出て申[illegible]仰詞に理ふ[illegible]誰[illegible]否や申
[illegible]御身[illegible]唯一人敵中に入り[illegible]
人々に[illegible]考慮を費[illegible]
事と参遅と引俱せ[illegible]
立て[illegible]候べと思切ふ[illegible]事勤も苦笑し[illegible]何と
も宜べぬ程ふ[illegible]側に扣へふる雷次に進出て江守大人に言葉を
ば無に[illegible]況に候べ[illegible]某量に過分ふる栄誉を被り候に
し敵兵に捕へ[illegible]永[illegible]国国の中に存ふ遂に覇府大人に
救へ[illegible]同席に存[illegible]事ふ
[illegible]無[illegible]候[illegible]這度玉に御供に八某及び賜恩建事[illegible]人を
召[illegible]死[illegible]と[illegible]申ふ江守
[illegible]感[illegible]面色に玉に御氣色を伺ひ[illegible]迂答[illegible]居ふ

当下弗勒々黠頭のにやよや雷次矢子より者いかるも世事が心操。
勇ましくも情むづし江守々功を譲らんとも思附かぬやいる
ゆたとかるも江守々頭を下げ現より過ちてこれ偶一雷次大人
建業大人がとも功を建てぬえんこれて素うしも心よ
願ふ所よ候軽佻しくも吻を挾うて過言れ赦さるせぬと忍ち
承知しかるなれば弗勒も喜びのれ雷次矢子を倶に事を定
やうしらで二人のもれて有難しと拜謝し又江守より種々と
禁しく礼を述べかるるるれば亜弗勒も其夜さう將
さま命令しぬにて枯樹嵐が陣営の側なる茂林色霧杜と
いふ処よ忍びやうよ隠れとて五人十人と出しやうつ吉用心れ
其ゝめよ物ゝで江守美震兄弟波緑艇参遥花離の五人より打
守ぶし兵五十人を引ゝ置きつ又御身々繻貝でもて賊

きていよ彩うのに同じく雷次建業まもて均き様よ柱をくめ事早
整ひくられば隨即元よ堅琴てやきもれて敵陣の傍近
くなぬにてやがて可笑き、壱音よりて御存知ち弾琴元目
人撥琶よ倣ひ夏山ち少せ子捉取ち無殺其外種々ち新
詩も新よ仕入て倣ひ幕ち内なる御徒然を拂ふるもとち
よ待召さるれば召れよと呼ばるるるば行過る声聞附
ぶし賊將枯樹嵐こそ好物ち来るれ見も聞もせぬ物ちば
盲人なるれば苦るるも甚麼ちるるも弾ゝて見人其奴呼ばね
と吻附れば一人の雑兵心得て兼幕掻分け外よ出ばつるる待
ちねこ盲人ども乗るも枯樹嵐の大王が陣中の徒然なるまて世事
よ一弾弾せのるとふるるるよ方よ来よとふるるよ仕濤しれる
と弗勒掌主従三人て肚裏よ思て故意と左有なぬちいまて

こゝに有難くこゝ候へ三人が三人打揃ふて皆盲目ゆへ
憚りなく御誘導とゝ雑兵まつなぐを心得
這方へ来よかれ其処へ大石ゆへ躓な躓まぬと手を把て
断く陣へ連行きつゝ枯樹嵐は知るまじく枯樹嵐も盲人の
体で霧時計見て其者此処へいるゝ雑兵と心得て目前
近く連行なば亜弗動等の態勤は有難きを迷るゝ心を
篭る難難辛苦悟られやすく思ふとゝやがて小首を傾ゝ
明るき方へ向きながらいるゝ物とゝ御聞は迷しまるゝ候
人目録読はせうも聞はゆびゝと
とゝ云ふ所は建業指へ傳へ声へ作りて読めるゝ所
流行の小詩并は古歌名高きも或ゝ数ゝも
多ゝる其中は先主ゝ軍中へ夏山の少女手振取の態

殺羅馬国の大火事議事堂の談遊是等ゝ極めゝ美ゝき詩
はゝ候第二ゝ申ゝ憚ゝ事なく詩の名なれば許ゝ
枯樹嵐王の御高徳是流行の小詩は候と言ゝ
枯樹嵐ゝ慢心ゝ堪難ゝ頗ゝ面白ゝ語ゝ思
ゝ愛ゝ妻ゝ味ゝ詩は等三人ゝ扶持せんず
ゝ疾く〳〵と促せば亜弗動ゝ頭ゝ下げゝ仰ゝ従ゝんと
ゝ堅琴ゝ前ゝ引寄せゝ〳〵と掻鳴ゝ調は打連
れゝ三人掛合ひ声高く北方ゝ吹く風ゝ寒しとぞ
思ひ小吹ゝ今ゝと花の雪も春風ゝ増しゝ
ごと民草の榮えゝるゝ迷ひの程こゝ
ゝと謹返しゝ詩ゝ声は微ゝ調ゝ
実然は聞ゝ杖とゝ詩里ゝ黄然と鳴ゝ

ほろほろと鼓音絶えざる繻の如くつの銅鼓の如くなる枯
樹が頑龍さへ聞くまでと感心し始めて思ひ出でて呵々とは
うらに打笑れ扨し世事が微妙さよ目其詮なき中まうる世の方も
り吹く風にて枯樹嵐寡人とうるるし下まで流行る詮こそ
時の様と現てうとうる誠に今流行詮の咎も有つし然
もなるべ貴人甚大傳ことに今酒譫せんなれば雷時疫
と休めし兵門酒者も用意せよと限し知れぬ自負廣言
鼻掻めらして喜ぶと忽ち乖る身の程と知るべき事こそ
笑止なれ扨も酒譫しくどめ当下枯樹嵐と貴人誉るも
酒と与へと強られて皆下戸なりとて辞えるで更て
美肉と四よ盛り種々強附ける始へ又うるやう暑ふ
目録を読うし時夏山の少女子とか名ある詮のうるとうれ

まき墓て艶やかなる興なるを伊誉三人よ杖持せんずと始め
うしと言毎よ尊大無比なる面憎きうるを三人と通ることに仰う
けむる候はねさるで御耳と申しまうるとうるるとうるる
又聖琴て引近づけ雷時なるるる後声細やうよ詮うるるる
るる谷なる水青く峯なる嵐よ通るるるや、立昇る旭と若
葉ごしるて影青し今盛りるる檜扇の花と何処と岩根ふ
う篭打撫き少女子づるるる檜扇の花と何処と岩根ふ
の蟬衣薄くるるるるるとうと農くて匂ふ薫りるるるる
匂ふるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
聖琴なる掻手行無水宇瓶蒼海波さ雁鳴詞五調金
整ひる前よる増しる妙なるるるる拍樹嵐つる氣よ楽まで
軽るるるる拂ひる曲と終るる待看るるるるるるるるるるる

思ひ切りて面白く話ひき吾よりも却て前より話ひ
なく心よ叶ふ者れ先其肉を食べうとふる頃も早日も暮果
て夜も戌頃なるもの枯樹嵐さえ大く酔れ舌も廻
ちまち逐ひ明りし
ろ故もあらぬ暴れ程と亜弗勒業も急と角の折を見
て中の士卒を暗算なる氏五十ばかりつゝ武器をつ
陣中の様子をかゝと詳しく早見定めるわで今も時分も
折もと帰ふんと思ふと雑兵より打向れ恐多くも
候ど小可業も常与しく家も戌のころ帰ふ例
と候ものゝ幾程も候と雑兵月影を仰見て
答るやう早戌も過ぎるし吾王も眠るもの故世業
なるとも無ふ帰ふまりく思ひ切で随意を為ても宜
し翌日ふ来ねと以ての三人も必ず喜びさうで翌

日ふ
望る月
なる
日ふ徒邪魔ふ候ん王御覧ぬ以ての
なる閉ふ入るれりしと以つ又も道ふ陣屋外ふ出し
ふ雷時ふ知しなど歩遅く歩ふれ忽ち足ふ
やめ直屋ふよふと語合れ程ふ色霧ふ着き
皆々悦喜雀躍し争れて迎ふ亜弗勒も陣中の様子迄々
と物語ふ直ふ向て命じぬれ引連れ忍びやふ枯樹嵐
ふ陣営の傍近く寄ふ忽ち出と舞彼とつゝ各々幔幕
所裂きく早中ふ打入然ふ燈を叩消ふ火も財兵用を
失ふ我先ふも雑酒し撃ふ駒ふ鞭を加へ駆て一つの長鎗
ふ二三人寄集ふ我のふ人ふよと争ふ限難ふ人方も
るき此方も孟勢付き中ふも雷次建業も早ふも那方ふ枯
樹内ふ騒ぎふ驚き目を覚し立上ふんとふる体を認め得

わざこと嬉しと忽側より寄近つき物ともてこそ孝て固め眉
間を皺と打悩まるを流石の財も堪難ね尻居を棹と倒るを
得ずと建業の事如伏せ忽綱を掛へられて喜勇める声
も勵しく二人均く呼びて曰う英倫の人の王覇勒王が恩顧
の忠臣雷次及び其子建業曝るを王を従いまるも枯樹崇が
陣中を弾琴を目人とうく入江に備を様子を見る未近き
を同盟を等閑と告知せ又我王を従ゆつう忽此処を知
らせつ早みでを枯樹嵐とぞ呼びて此之生捕る有様を懲
やとて声聞て覇勒王が出来しかう雷次建業と我側
連来ると寛く言葉を敵兵に呆れ呆れ
皆阿諂々と首を低れ其処を降参しかう〳〵と揃決き
事なりつつ覇勒の大王を一先降人を搦めきせ引立や

々枯樹嵐が本城を押寄る早此処なる岩屋を事趣聞知て
や皆行失せ〳〵影もなく隨助館を入るせるを珠玉美人
の数多を扉を交ち後堂を埋め驕奢を尽と側に皆
其家を放遣り珠玉を請将を賜をつつ是を沙馬寨を
なりなる国守等を召賜て諸国の残賊を討せ
ると諍々しかりて此之者〳〵枯樹嵐が処分を
りぬ群臣各意見を陳遂に多数を決を取り仕改を手に
しめを之が命を差赦して臣下の中を加へめて枯樹崇も此
時を始め前非を後悔しつ拝謝厚く恩意を拝承
しかりしを往の風聞々くを魁賞々阿容々と出事
闕を至て降服し命を乞を此事し諸臣の意見を付せ
を皆其外を恵むを之を赦さんとをもを遂に

首を刎られ其財産没収の虜分に各軽重なれども
冥像なれば其罪を論じ諸臣の功を論じ江守美麗
第一として賞を加へらるる里人より其賞にて羅
卓夫も召出されて御賜物ほうしたれども更めて亜弗勒を江守及
び雷次郎子建業を召出され江守と美麗と結婚せしめ江守
と瑠璃と結婚せしめ各性質相同じく善も相当されば
之を因て羅卓夫と其妻優臘を江守の方より引取らせ
終へたるこれ後の話なり　是より亜弗勒を華門度の墓
に葬り行き詳なり盛に斯て
諸事漸に緒に就きのち亜弗勒を熱心に諸臣と倶
に国勢を隆盛に勤めれ始めて海軍を建創し当時の如き
其勢世界に冠たるの端緒を開き始めて国律を点検して

法令の基礎を為し始めて郡県の境界を正し始めて一統政
治の法を起し始めて海岸に砲臺を築き始めて諸国と相通
じ貿易を盛にし始めて学校を虜々に建て諸国より学
者を聘し開化を進め教育を施し現に当今世界に有名なる
ケスフォード等の如き学者を此王設けられ右の外裁判官
陪審官を置き零落したる都城を興し物品の製造を専ら
出業工事等を定め英倫の現今の隆盛を効せるも
誠に此王の勧奨に初めなせしに因るもの
なり実に此王は世界宇宙に飾なる処今に至るも英国の
国民たる者は御恩を感佩せざるものなし遂に天下の評に
も大王と申奉るも豈たれ宜なる所なるべし　亜
弗勒の旧諸侯の中にて如何宮に葬られ世四年位を嗣

九十四

紀元前一年十月廿六日御齢五十二にて崩れさせ給ひ国民挙哭々一方ならず寂然父母を失ひしが如く歎悲しとつふ兎まも角まも例少き無双なる君なり其外江守しそん

の明王

とはゞめと此王ありせまし有功の人々こゝろも或く多くの子孫

をもち或々長く命を保ちなゞ安楽まうゐせとぞ

字数凡三万三千四百十七字

三百五十二

正誤

四十丁二行　知らせての下に約束で守らるる事行髪と呼寄せ〜

其城に留守せめの世四字を入る

七十八丁三行　癒よ癒よの下に「つまのくわ禍を逐ふ元辣那が祭

祀もなさでなるる」の世六字を入る

九十三丁八行　畢勒ハの下に「さやは佛蘭西ら借入れ〜一時国内の

飢饉を救ひ穀物を利を加へ〜返債し」の世七字

を入る

五十九行　営まるるの下に「又四ろの事ら〜波羅斯が妻愛海

ら全く奸賊更蒼のため殺さるるら〜聞なれば一バ

ちるいち亜熱児ら石碑を建て其壮烈を叙しぬる」の二十三

字を入る